

# 沈黙の脱獄

2006(平成18)年4月2日鑑賞(ホクテンザ1)

★★



監督＝ドン・E・ファンルロイ／出演＝スティーヴン・セガール／トレッチ／サラ・バクストン／マリ・モロー／ニック・マンキューゾ／ケヴィン・タイ／ロバート・ミアノ（アートポート配給／2005年アメリカ映画／91分）

……スティーヴン・セガール主演の『沈黙』シリーズは安定した面白さをキープしているが、10作目ともなると少しマンネリ気味……？ 今回は相棒の選択はいいのだが、肝心の敵役がカッコをつけるばかりで、あまりにも弱すぎるため、セガールのアクションにも緊張感がまるでなし……。また、奪われた2000万ドル追求のストーリーも中途半端なうえ、2人の女優がもうひとつ……。せめて、ベッピンの1人ぐらいは登場させてくれないか……？

## 『沈黙』シリーズも少しマンネリ化……？

日本の『寅さん』シリーズまではまだまだだが、その数においては、スティーヴン・セガール主演の『沈黙』シリーズは『007』シリーズと同じ10作近くになってきた。『007』シリーズは20年間をかけた。またジェームズ・ボンド役も何度か代替わりした世界的大ヒットシリーズだが、それに比べれば『沈黙』シリーズは小粒でB級映画……。

それでもこのシリーズは一定の面白さをキープしているが、最近は少々マンネリ気味……。そこで大きなお世話ながら、以下それをいくつかの視点から……。

## マンネリ性その1——ストーリー性は？

どんな映画でもストーリーづくりにおいては脚本が命だが、とりわけシリーズものは「今回のテーマは〇〇」と明確に定めることが大切。今回は『沈黙の脱獄』だから、脱獄がテーマであることはタイトルからわかるが、どうもそのテ

マが絞り切れていないことが今回最大の難点。まず、脱獄のためには刑務所に入らなければならない。そのため、ハーラン（スティーヴン・セガール）は、現金輸送会社の経営者であるマックス（ケヴィン・タイ）やハーランの運転する現金輸送車に乗るブルーノ（ロバート・ミアノ）らにはめられたうえ、2000万ドルを奪われてしまうという、とってつけたような物語からスタートさせ、やっとハーランを刑務所の中に……。また、脱獄をめぐるストーリーはそれなりに面白いのだが、実はこの映画の本当のテーマは、脱獄した後の2000万ドル強奪事件の報復にあることが次第にわかってくる。しかしこの手の映画では、ストーリーはシンプルでわかりやすいものにした方がよいのでは……？

### マンネリ性その2——相棒は？

ヒーローは1人だけでもいいのだが、相棒が登場した方がシリーズものは継続しやすいもので、『沈黙』シリーズでもそれは同じ。『寅さん』シリーズでは、マドンナに誰が起用されるのかが大きなポイントになるのと同じようなものだ。

今回の相棒を演じるのは、黒人ラッパーながら現在は役者活動をメインにしているというトレッチだが、もちろん私は全然知らない俳優。ハーランが刑務所に入って知り合ったのが、先客（？）として刑務所内の囚人たちを仕切っていたこのアイス・クール（トレッチ）だったが、2000万ドルの行方を探るため刑務所内には既にマックスの手下たちが待ちかまえていた。そんな中で、ハーランとアイスとの「盟友関係」が成立し、アイスの力によってハーランの脱獄計画が練られることに……。黒人俳優の演技力は日本人の私たちにはわかりにくいですが、そのとぼけた味はまずまずで、この映画での相棒選びのセンスは悪くないと思ったが……。

### マンネリ性その3——強力な敵役が大切だが……？

『沈黙』シリーズにおいては、強力な敵役の存在が不可欠。それが強ければ強いほど、緊張感が増すのは当然だ。ところが今回は、これがまるでダメ。刑務所内に送り込まれたマックスの手下たちはイチコロだし、脱獄した後に展開されるマックスやブルーノたちの「ケンカ能力」もまるでダメ……。この映画を少し複

雑にさせ、深みを与えているのは、警察の上層部であるサンダーズ刑事（ニック・マンキューズ）がマックスと結びついているということだが、やっとその悪の張本人が登場してきても、ケンカはまるでダメ……。

これでは、2大政党制を標榜していた民主党が偽メール事件で一人勝手にコケてしまったため、小泉自民党が一人勝ち状態になっているのと同じで、一方的にハーランが強すぎることになるため、観ている方はどうも肩すかしの感が……？

#### マンネリ性その4——スティーヴン・セガールのアクションは？

スティーヴン・セガールのアクションが冴えるためには相手方が重要だが、銃による乱撃戦はあまり面白くないもの。なぜなら、銃を使ったのでは、なぜセガールの身体には命中せず、相手ばかりに命中するのかがさっぱりわからないから……？ やはりセガールアクションとして是非観たいのは、空手、柔道、剣道、合気道などの古来の武術の冴え。

そもそもセガールに体力的に劣っている敵役では、見ただけで所詮かなわないと思ってしまうから、まずは肉体だけでもセガールに負けない敵役をキャスティングしなければ……。そんな敵を相手に、セガールが持つ多様な武術の冴えを見せてくれば、それだけで『沈黙』シリーズは満足とまで、言ってもいいのだが……？

#### マンネリ性その5——女優の美しさは……？

この映画には2人の女性が登場する。1人は女性特有の超能力を持つハーランの妻ジェイダ（マリ・モロー）。彼女が得体の知れない夢を見たためハーランは宗旨変え（？）を決意し、悪人から貴金属や大金を盗み出し、それを恵まれない人々に寄付するという石川五右衛門バリの大泥棒から、堅気の仕事に戻るというのが最初のストーリー。それほどまでにハーランの生き方に影響を及ぼすという事は、ハーランがジェイダを愛している証拠……。

もう1人は、サンダーズ刑事の下で2000万ドル強奪事件の取り調べにあたるレイチェル刑事（サラ・バクストン）。彼女はそれなりの役割を果たしているのだが、残念なのは、失礼ながらこのレイチェル刑事があまりキュートでないこと

……。

ハーランの妻はまあ誰でもいいのだが、事件の捜査からさらにつっこんだゴタゴタに巻き込まれる中で、活躍する女性刑事には、もう少しフレッシュで魅力的な女優を配してほしいかと思うのは私ひとり……？

やはり、シリーズごとに1人ぐらいはベッピンを起用してもらわなければ……。

## 次回作に期待……？

シリーズものに多少の出来、不出来があるのは当然だから、以上述べたように今回は少し出来が悪かったものとして割り切り、次回作に期待しよう。セガールさん引き続き頑張る……。

2006(平成18)年4月3日記

### ミニコラム

#### 戦争映画のシリーズ化に期待！

『寅さん』や『釣りバカ』シリーズは役者の強烈な個性が大前提だが、テーマごとのシリーズ化も可能はず。そこで期待したいのが、かつての東宝の「終戦記念日戦争映画大作」シリーズのような、戦争映画のシリーズ化。これは決して私が好戦的で、日本の軍国主義復活を願っているからではなく、その逆。かつて日本がアメリカと戦ったと聞いて、「エー、ウッソー」と叫ぶ女の子がいるような国は、どう考えてもおかしいし、そんな国民が多数を占める中で平和など、まさに砂上の楼閣で早晚崩れていくことは明らか。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康を学ぶ

のもいいが、日本人は、石原莞爾、山本五十六、東條英機そして近衛文麿らを学ぶことも大切。なぜならそれは、アジアで唯一ヨーロッパ列強による植民地化を阻止して近代国家を樹立し、明治・大正・昭和と続いた日本が、1931年9月18日の柳条湖事件以降なぜ日中戦争に、そして1941年12月8日の真珠湾攻撃による大東亜戦争(太平洋戦争)になぜ突入していったのかを学ぶことだから。多種多様な視点から「あの戦争」を描き、考えるネタを広く提供することは映画人の義務では……？

2006(平成18)年8月16日記